



LAVES RESORTS HOTEL

「ふうー、勝った勝った」
俺はパチンコで分厚くなった財布を眺めながら、
ケタケタと笑う。

濱屋
4F

カラオケ

コインロッカー
コインロッカー

LAVES RESORTS HOTEL
ROOM RATES
Single Room 10,000
Double Room 15,000
Suite 20,000
...
RESERVATION
TEL: 03-XXXX-XXXX
WWW.LAVESRESORTS.COM

俺は相川昭二郎。

こんな昼間からパチをしているような人間だ。

まあ、ちょっと前まで半グレやってて

お天道様の下を歩けなかった頃よりは

マシな生活をしてる。

そんな俺が事故死した兄夫婦の一人娘を

引き取ることになった。

親を失った悲しみを乗り越え、

気丈に、そして前向きに生きる彼女を間近で見て

俺は『真面目に生きること』の大切さを

学んでいくことになる…



んなわけ、ねーっての！（笑）

誰が好き好んで、他人の娘を引き取るかっつーの。
親戚同士で押し付け合いした挙句
俺んここに話が来たってわけよ。

俺だって、あのクソ兄貴の娘なんて引き受けたくねえ。
だけどな、俺は思い出したのよ。
兄貴が海外に大量のビットコインを抱えた回座を
持つてるって話してたことを。

遺産管理の弁護士も把握してなかったから
そりゃチャンスだべ♪
俺は快く娘を引き受けた。

でも意外と隠し財産は少なかったな。
ったく：ビットコインが暴落する前に
夫婦そろって死んでくれれば良かったのによお！

ソッコーで俺の口座に
ビットコインを送金したから
もう娘は用済みなんだが
コイツが意外と役に立ちそうだ
メシ、掃除、洗濯が
一通りできるってのもあるが
何より女なんだから
『使い道』はいくらでもある。
どうすれば一番カネになるか
悩みどころだ。

（笑）

そんなことを考えながら
俺は公園の中に入る。

「朝から打ちっぱなしで、ケツが痛いぜ」

勝ったカネでキャバか風俗に行こうかとも思ったが
さすがにまだ夕方前では早すぎる。

「とりあえず、いったん帰るか…」

ぶらぶらと公園を歩きながら
家へと向かう。

「ん…？」

向こうにいるのは…
ウロサをすればってヤツか (笑)

「おらっ！ ちとせっ！」

「あ…！ おじちゃん」

コイツが兄貴の一人娘、相川ちとせ。
9歳で、小学4年生…だったかな。

「こんな所で何やってるんだ？」

「うん、学校の帰りに
お夕飯の買い物をしてきたの」

そう言ったら

ちとせは買い物袋を俺に見せる。

クス…

!



家事スキルがない俺でも
ちとせの家事の上手さは分かる。
かなり利発で物覚えもいい。
きつと母親にもしつかり仕込まれたんだろう。

「おじちゃんも、いま帰りなの？」

「ああ、パチンコで大勝ちして
ウハウハだぜ♪」

「ふふ…よかったね」

クスッと笑う表情が可愛い。
学校でもモテそうなタイプだ。

クス...



「今日の夜メシはなんなんだ？」

「ふふ…ナイシヨですよー☆
楽しみにしててくださいね」

悪戯っぽく笑うその表情は
普通のヤツには天使の微笑みなんだろう。
だが俺には被虐のスイッチだ。

ふふふ



「おい。スカートまくれや」

「!」

突然の命令に、ちとせの体が硬直する。

「聞こえなかったか？
スカートをまくって、
中を見せてみる」

!?

んん



「え…？ だって…こんなところだ…」

「場所は無関係なだろ？」

俺がやれと言ったら、やれや」

「…でも…誰かに見られたら…」

躊躇するちとせ。

ふん…まだ従順じゃないか。

公開露出ぐらい、迷わずにさせないとな。

ちとせ

ケケケケ



「よく見る。
今この公園には俺たちしかないんだろ？」

「……」

「お前がするまで家に帰れないぞ。
それとも誰かいたほうがいいのか？」

「…ひひひ……はひひ…」

ちとせは観念して震える手で
スカートをめくり上げる。

ケキケキ

おち。



ちとせがスカートをまくり上げると
そこには無毛の丘があった。

「よし、言い付け通り
ノーパンで学校に行ってたな」

「うう…はずかしい……」

ちとせはさすがのような瞳で
俺を見つめている。
だが、俺にはそんな哀願は
通用しない。

「9歳でも恥ずかしいって
感情があるんだな」

「ひら…やだよお…」



「おねがい…おじちゃん…
もう「こんなことやめて…」」

「やめてっていうのは、ノーペンのことか？
それとも外で恥ずかしい格好をすることか？」

「…両方…」

「あのなあ…お前にパンツなんて
いらねえだろ？」

「だって…」

「大人の女は生理やらオリモノがあるから
パンツがないとダダ洩れなんだよ」

「……」

「そういうの学校じゃ教えないのか？
今のお前にはいらねえよ」



そして俺は曇みかけるように言う。

「んで、外で恥ずかしいことを
させるのは、俺の趣味だ（笑）」

「……」

ちとせが体を震わせながら、
顔をゆがめる。

あはは…
絶望にまみれたい表情だ。



「つーか、お前も楽しめよ。
外でスケベなことをするのは
楽しいべ」

「そんなこと…
私…ヘンタイじゃないし…」

「だったら変態になれや。
俺に生意気吐きやがると
ここで全裸に剥いちまうぞー！」

「ひら…いやあぁ…！
おじちゃん…！めんなさー…！」



「あっ！ あっちに人が！」

「ひそひそ…」

俺が遠くを指さすと
ちとせが必死の形相で振り返る。

「アハハ！」

ウツだよ、バーカ♪ ひゃはは…」

「うらうら…ひそく…」

よほど怯えているのだろう。
見てわかるほどに体を震わせ、
泣いている。

この辺にしておくか…。
マジで誰かに見つかって
通報されても面倒だしな。
野外調教はゆっくりやるう。





「よし帰るぞ。スカート戻せ」

ちとせはホツとした顔をしてスカートを下ろす。

「続きは家に着いてから、タップリとな」

「!.....はい...」

言葉ではYESと言っているが、表情が気に入らない。

「なんだ！ なんか不満でもあるのか！」

「そんな...こと...ありません...」

「お前のオヤジたちが死んだ後、引き取ってやったのは誰だ？」

「おじちゃんです...」



「毎日メン喰わせてやって
学校にも行かせてやってるのは誰だ！」

「…おじちゃん…です…」

「だったら、その感謝を行動で示せや。
お前のオフクロはそんなことも教えてくれなかったのか？
マジでアホな女だったんだな。死んで正解だな」

「…お母さんのこと…うう…悪く…言わないで…ください…
私が悪いんです…ごめん…なさい…ううう…」

ちとせは泣きながら、謝罪してくる。
死んだ母親を侮辱されて、シロツクなのだろう。
扱いやすいチヨロいヤツだ（笑）

「泣くな。他人に見られたら、俺がいじめてるみたいだろ？」

「…うう…ごめんなさい…」

「まあいい。お前のオフクロの代わりに
俺がしっかり調教…じゃなくてしつけをしてやるよ」

「……………はい…」

兄貴たちもマジ面白いオモチャを残してくれたよな。

従順で、メシも家事もできて、
性処理までできるオモチャなんてな。

今日一日ノーパンで学校生活をしてたかと思うと、
それだけで勃起するぜ。
ぶっちゃけ、「ノーパンで学校に行け」なんて俺の言い付け、
守らないと思ってたよ。
フツー、帰りの家の直前で脱いだりするべ。
それがバカ正直に言いなりになるなんてなあ。

面白い：

今日はコイツがどこまで俺の言いなりになるか、
遊んでみるか。

そんなことを考えながら、
俺たちは家に帰った。

姪っ子ペット嫁化計画